

まず、岐部城跡に登った。国東の豪族岐部氏の砦である。海を渡ってくる敵襲に備えた物見山的なものであったように思えた。麓にペトロ岐部カスイの記念公園が設置されている。岐部水軍の末裔であった彼は、ここからはるか彼方の海に向かってに思いを馳せていたような気がする。長崎・有馬のセミリオで学び、元和元年マカオに渡り、インド経由で日本人初の聖地エルサレムを訪問、元和六年ローマに到着し、司祭に叙階された。同八年帰国の途に就き、マドリッド、リスボン、インド、マカオ、シヤム、マニラ等を経て、同七年ルバンダ島を出発して薩摩の坊津に到着した。ペトロ岐部の、現在でも気の遠くなるような凄まじい行程を可能にしたものは何であったのか。彼の信念の強さと行動力には言葉を失う。その後長崎から東北に渡り、仙台で捕縛され、江戸での凄まじい拷問にも棄教せず殉教した。ペトロ岐部は、あの時代に、この辺境の地から出た奇跡の人ともいべき偉人である。

有永邸は、この地の大庄屋であった。豪華な母屋、離れや蔵、馬屋等に巨石や松などを配した見事な庭を持つ大邸宅である。耕地面積も広くない国東半島にこれだけの屋敷を構えていたとは驚きである。農業だけではなく、漁業、交易などからの財を得ていたのだろうか。これだけの名家も継承する

者がなく、町に寄贈されたことは、現在の過疎地の状況の縮図である。同じ国東半島にある私の親族の有長家(母の生家)や平尾家(姉の婚家)も同じような状況であると思った。

今回の史談会の研修旅行も、大分県の知らない歴史等を学べ、心に残るものとなった。次回も楽しみにしながら、有意義なバスツアーを終えたのだった。

市外史跡探訪

石川 学

平成二十六年十一月十六日(日)、別府史談会市外史跡探訪バスツアーに三十四名で参加した。はじめに杵築市に行き、きつき城下町資料館を見学した。資料館は庭園が美しく整備されており、敷石の代わりに瓦が敷き詰められ、歩きやすくなっていた。資料館内は杵築城下の模型や貴重な文化財が収集保管されており大変興味深く見学することができた。研修室では、杵築市教育委員会生涯学習課の吉田和彦さんが、スライドを使って近年注目されている杵築城藩主御殿跡の解説

をしてくれた。講義の後、バスにて、杵築中学校のある発掘現場に移動し、現地での説明を聞いた。すぐ近くにある杵築城まで徒歩で移動し、城内にある展示物や最上階からの眺望を楽しんだ。資料館では、展示物を観るのに時を忘れ、最後になるまで粘ったため、みなさんに迷惑をかけてしまった。

今年の大河ドラマ「軍師・官兵衛」の主人公、黒田官兵衛ゆかりの安岐城跡、富来城跡は時間の関係で車内案内だけで通り過ぎてしまったが、国東市国見町岐部にある国見ふるさと展示館資料館（旧有永邸主屋^{きむら}）では十分な見学時間を得ることができた。ここは国見出身のペトロ・カスイ神父記念公園に隣接する資料館で、明治初期に築造された築一四〇年の庄屋屋敷のなかにペトロ岐部カスイ神父の資料を中心にした歴史資料が展示されている。裏山は鎌倉時代に築城された岐部城跡である。麓に岐部一族の累代墓があり、山頂からは姫島や周防灘を見渡すことができた。

ペトロ岐部カスイは父ロマノ岐部、母マリア奈多との間に生まれ、一五八〇年（天正一五年）にこの地で生まれた。「生まれは日本の国、浦辺である」岐部神父が、イエズス会入会にあたり一六二〇年（元和六年）に提出した報告書にこのように書かれている。ロマノ岐部は城主、岐部一辰の親戚であ

り、家臣であったことなどからも、ここが岐部神父の出身地であることがわかる。一六三九年（寛永十六年）、岐部神父殉教の報を聞いたローマでは、彼を福者にという話が持ち上がったが、禁教下の日本では調査ができず、岐部神父の名は次第に時代のなかに埋もれていった。彼の名が再び表舞台に登場するようになったのは、イエズス会のフーベルト・チーシリク師の尽力によるものである。一九六二年（昭和三十七年）、記念公園が整備され、一九六五年（昭和四十年）には船越保武氏作のペトロ岐部カスイ神父の像が建てられた。資料館ではこれらの歴史をわかりやすく学ぶことができる。今回の探訪は天気にも恵まれ、大変よいひと時を過ごすことができた。参加されたみなさんお疲れさまでした。